

第3回 長良川河口堰の更なる弾力的な運用に関するモニタリング部会 議事要旨

1. 日時：平成24年3月28日9:30～11:30
2. 場所：レセプションハウス名古屋通信会館(6階 葵の間)
3. 出席者：松尾部会長、辻本部会長代理、関口委員、藤田委員
4. 議事要旨

【総括】

平成23年度のフラッシュ操作に伴う調査結果の整理および数値解析シミュレーション状況について、事務局からの説明に対して審議がなされ、意見が出された。

平成24年度の長良川河口堰の更なる弾力的な運用に関し、事務局からフラッシュ操作の新たな操作パターンが提案されるとともに調査計画について説明があり、これらについて意見が出された。

各委員からの主な意見は以下の通り。

1) 調査結果全般について

- ・底質、底生動物の調査結果については、河床形状・ゲート位置・操作方法などを合わせて整理・分析していく必要がある。
- ・底質の酸化還元電位の結果については、たとえば4kmのグラフでは経時的に数値が上昇している傾向にあり、季節的なものか否かも検討していく必要がある。これらがゲートおよび操作に関連するものか見ていく必要がある。
- ・底層DOの改善された状況について、要因がわかるような整理とともに、時間スケールを詳細に見ていく必要がある。
- ・DOの改善状況については、目的と調査内容の整合や、自動観測データをどう使うかに留意して行うこと。DOの改善については、風・気温・流量等の各種外的条件も含めて分析すること。
- ・DOの改善で何が出来るか、何を以て効果というか、改善目的をよく考えておく必要がある。長期的には浮泥の変化の把握も重要である。
- ・フラッシュ操作で放出する量は堰上流水量に比べて小さい。広範囲を一様に検証するのは難しい。まず堰近傍で効果を検証し段階的に範囲を広げていくことが重要。
- ・全体を考えるに当たり、どのような素過程が現象に関わっているか、またそれらの軽重はどのようなかを明らかにするように努める。
- ・現地観測と数値モデルを効果的に組み合わせて全体像を把握するべきである。
- ・以上のことを踏まえてモニタリング方法を整理し、24年度の調査に反映していただきたい。

－以上－